



四半世紀を振り返る

株式会社 NJS / 東京総合事務所 / 環境マネジメント部 亀田由季子



1. はじめに

私が株式会社NJS（当時は日本上下水道設計株式会社）に入社してから、約四半世紀が経ってしまいました。子供の頃は医者を目指したこともありましたが、その力には限界があることが家族との別れで分かり、より多くの人や生き物を幸せにできる社会基盤と環境に関する仕事をしたいと思って土木の道を志しました。振り返ってみるとなかなか思い通りではなかったことも多いですが、凡そやりたい方向に進めているのではないかと思います。

2. 職務の歴史

(1) 横浜事務所の思い出

私は入社してから2年間、横浜事務所に配属されました。この2年間がなければ、おそらくNJSを辞めていたのではないかと思うくらい、私にとっては宝物のような時間だったと思います。

横浜事務所は地方事務所の一つで、当時の人数は50人程度だったと思いますが、バイトさんからベテランまで皆、仲が良く雰囲気の良い職場でした。休日出勤や深夜残業等、肉体的には大変な面もあったかもしれませんが、夜になるとどこからともなく缶ビールを開ける音が聞こえたり、夜中にTVを見ながら先輩たちとアイスを食べたり、昼休みに豪華客船を見にふ頭へ走って行ったりと楽しい思い出が多いです。これらは時間管理の甘かった時代だからできたことも多かったと思います。

業務は下水道計画関連を行っていました。特に、1年目から担当となった流域別下水道整備総合計画の策定業務は上司の言葉どおり、事業計画や全体計画に下りる前の数値の作り方や計画業務の流れが分かり、計画業務全体を知る上で貴重な体験となりました。因みにこの流域計画は足掛け4年程度かけた思い出深い業務です。

(2) 技術本部の思い出

3年目からは本社の技術本部へ異動となり、主に下水汚泥の処理・利活用に関する業務を行いました。それまでと異なり、社員は皆、専門性の高い人が多かったため、和気あいあいという雰囲気ではなく、冷たい職場だ…と

思った記憶があります。

全国規模で仕事をしていたため、繁忙期には週に3～4回の頻度で出張していました。なので、時には出張先のNJSの事務所のカギを借りて深夜まで作業していただくこともありました。飛行機のマイルがめっちゃくちゃ貯まってちょっとリッチな気分にも浸れました。

(3) その後の業務から現在

その後、出産育児を経て今に至るわけですが、大きな転機となったのは1人目の育児休暇から戻って間もない7月のこと。省エネ法改正に関する社内問合せに答えたところ、当時の上司が一言、「亀田さん、ネット申し込みなら今日まで受験できるよ、エネルギー管理士。」誰かがとっているだろうと思っていたのに、予想外に自分が受験することに。その縁もあってか、下水汚泥以外にも下水処理場の省エネ・創エネ関連業務に段々とシフトしていきました。

自分としても、子供がいたので時間的に制約があり、時間に制約のない人達よりも、自分の付加価値を出さないと業界で生きていけないと思っていました。そのためエネルギー管理士をとり、計画屋だけれどもエネルギー関係もできるという強みを持つことができたと思います。

最近では下水道事業における資源・エネルギー利用の検討業務を軸に、汚泥の利活用に関係するPPP/PFI事業のFSやアドバイザー業務や、昨今の流行に乗りやすい性格のためか下水疫学調査や脱炭素計画等を行ったりしています。おかげでスタンダードな下水道計画に関わることが少なくなってしまい、逆にちょっと毛色が変わった業務だと私が担当だろうとメーカーさんから当たりを付けられる始末です。

そのため、私の部下はスタンダードな下水道計画業務を身につけられなくて、申し訳ないなと思います。それでも、今後も、社会や環境に役立てられて、自分がやりがいを感じられるような仕事を行っていきたいと思います。

3. 育児と仕事

プライベートな話では、技術士（下水道部門）を取ってから結婚し子供が生まれました。育児休暇を取って職場復帰し、2人目も同様に育児休暇をとって復帰したの



写真-1 夜桜撮影に夢中な子供たち



写真-2 テーマ「涼」?の写真

で、同期入社と比べると2年ほどさぼっている計算になります。ですが、育休経験者の皆様はお分かりの通り、育児休暇は「休暇」ではなくて、会社の仕事のほうが数十倍ラクということに身染みて感じました。

そんな子供たちも早いもので大学生と高校生。育児をしながら働くのは、職場では片手間で仕事をしていると誤解されたり、家庭では小学生時代、学童保育へのお迎えが毎回遅くなって糾弾されたり、平日は帰宅後に超高速で家事をこなさないとならなかったりとネタに困らないくらい大変です。ただ、自分の中で決めていたのは、この子供がいたから仕事等で自分がやりたいことをやれなかったと、後から絶対に思わないこと。また、子供がいて仕事をしているという強みを最大限に生かすことです。

例えば、子供たちが保育園に通っていたときはPTA会長をして子供らの前で劇をしたり、小学生の頃は学童保育で会計をして色々な立場の父母を知ったり、息子の所属したスポーツ少年団ではサッカーのコーチをしたり、子供がいなければ知らなかった世界を知れたことは貴重な経験になったと思います。もちろん、ママ友もできて親しいママ友とはコロナ禍前はよく飲みにいったりして、子供より親が楽しんでいました。

最近、子供たちも自分の進みたい方向に舵を切っており、両親が理系なのに2人とも違う方向に進んでいてなかなか楽しいです。娘の場合、映像関連の分野に進んだのですが、この夏休みの課題の一つは「涼」がテーマの写真でした。今まで写真には全く縁がなかった私ですが、真似をして撮ってみました。この夏、コロナ禍で帰

れなかった故郷に3年ぶりの帰省をした時の写真です。

夫のことですが、最近、2人の共通の趣味(?)である筋トレを週末に行っています。夫はバルクアップを目指しており、色々体や器具に重しをつけてトレーニングしています。因みに私は軽い負荷で体重減少を目指しています。因みに目指しているだけで効果のほどは定かではありません。

4. おわりに

入社当時は珍しがられた総合職女子社員も、近年は非常に多くなっており、将来が楽しみです。それでも、会社の常識は男性の常識で回っている部分が多いので、こちらの意見を分かってもらうまでに時間がかかることもあります。

また、最近、少子高齢化の人手不足で、顧客からの仕事量が多いこと、また価値観の多様化による意見の相違が多くなり、昔よりも言葉をかなり尽くさないと正しいと思うことでも伝わらないことが多くなったと思います。よって業務にかかる時間も長くなり、より良い仕事を行いたいと考えていても作業や考察の時間が少なくなり、もどかしい気持ちを抱えることが多くなりました。今後は、女性男性関係なく、業務のキャパシティの考え方、時間の使い方を従来とは異なる視点で考えていく必要があるのではないかと思います。

最後に、仕事を下さる顧客の皆様、業務と一緒に頑張ってお下さる職場の仲間、いつも笑顔をくれる家族に感謝します。